

白隠禪師と興禪護國

附 東嶺和尚と神道

對 本 愛 道

徳川中期は、或る意味に於て、我が近世史上國民精神の最も弛緩した時代と云ふことが出来る。

江戸太平繪詞に

今は主君と先祖との恩恵にて、飽食暖衣し、妻子に傲り、家人を責使ひ、榮耀に暮らし、槍刀は錆も拭はず、具足は土用干に一度見るばかり、刀脇差も有用のものとは思はずや、飾りの美、異風の拵へのみを物數奇、無益の費に金銀を棄て、衣服も今様を好み、妻子にも華美風流を飾らせ、遊山翫水芝居物見に公祿を費し、百姓を責めはたり取揚げ、借金方へは不沙汰し次第々々にすり切り、果は家人も養はれざる輩多し。

と武家の常時の墮落ぶりを、さらけ出してゐるが、更に井上金峨の病間長話に述べてゐるところをみれば、愈々その心底見届け得て餘りある。

近年の若武士は、他行などするにも二本棒は野暮らしきなど、出入の町人の所へ預けるものも

あり、又は一刀帯びるもあり、駕籠を出でたる鳥の心になりて、淨瑠璃屋にて町人とみらるゝを喜ぶもの多し

その頃、武士は時代の指導階級であつた。上の行するところ、下之に倣ふ。推して一般をはかるべしである。元祿時代に端を發し、中間享保の治等二三の小康を得たとは云へ、遂に田沼時代に至る。白隱禪師は、かうした社會狀勢を背景として、五百年間出底の面目を全ふされたのである。

× ×

白隱禪師を以て、格別の勤王僧と呼ぶことは當らないが、彼が四海五湖に遊化接得するところ、之を國民精神の角度より覗むるとき、一として興禪護國に非るはない。それは、斯かる末世的風潮の時代にあつて、専ら精神の開拓に放身捨命し、遂に斷絶に頻せんとせる禪門の血脈を蘇活し、以て緇素をして勇猛奮起せしめ、時の國學勃興期へ有形無形の偉大なる心的要素を提供したからである。

諸人その自己靈妙不思議を識得せば、力を勞せず造作を用ひず活潑に地轉轉々地、即ち是れ我皇國の大和魂なり。^{註①}

まことに、白隱は、我皇國の大和魂をその根源に於て把握する心法を中興したことに於て、日本精神史上に燦たる光明を放つものと信ずる。

白隱は、原驛の松蔭寺に住し、眼のあたり秀峰富士を仰ぎつゝ、日夜大衆道俗の攝化に餘念がなかつたのであるが、恐らく此の神國の表徴たる富嶽が與へる無言のものは、白隱をして皇國に對する自覺を深からしめたに違ひない。

至達の極、昏々黙々たり。至道の精、杳々冥々たり。昏冥纔かに動すれば、兩儀斯に在り。清虛なる者名けて高天と爲し、凝結する者厚土と爲す。厚土裏に大魂有り。名けて富士峰と爲す。勢ひ三州を雄壓し、徳扶桑を鎮護す。(濃州富士山記、荆叢毒藥卷五)

當時「駿河には過ぎたるもの二つあり」とて、世人より富士山と並び稱せられた白隱であるが、定めし白隱自身も、その徳富士と等しく共に扶桑日本の鎮護を志向して止まなかつたものと察する。されば、聖上に對し奉りても「南海の象樹、春秋を知らず」「長春殿上に金鐘動じ、萬歲山前に玉漏遅し」「王寶殿に登れば、野老謳歌す」(共に槐安國語卷頭)と述べて、皇統の萬代迄も彌榮へましまさんことを希ひ且つ御仁慈の厚きことを誦し奉つてゐる。又正旦示衆に「鳥後曉鐘春を告げ來る。人は百花に魁けて笑顔を開く。東皇此日龍眠穩なり。爐上の淡茶、籬外の梅」とて、新年に先づ、思ひを至尊に馳せ參らせ、芽出度き御代の大平を壽ぎ奉り、日々是好日のありがたさを奉謝することを忘れない。更に槐安國語卷頭「拈衣」の下語に、「都府樓纔に瓦色を見、觀音寺只鐘聲を聽く」と菅原道實配所詩中の二首を學し、天恩に對する自己の全心境を吐露してゐるが、之に就ては川上

孤山和尚は妙心寺史に次の如く述べてゐる。

吾人之を一讀三復し來つて無量の感慨無き能はず、此の下語に依つて、吾人は當年の大燈が、後醍醐天皇の勅命に畏み、紫野龍寶山頭に出世開堂の儀を講じ大獅子吼した時、恩賜の紫衣を拵じた其の心懷は、事こそ違ふも、眞に菅公が當時の天皇を追懷せし凄楚愁怨の心狀に等しきものがあつた、かと思はれる。さて菅公の詩の如く「恩賜の御衣今こゝに在り」の句は此下語一場に於ては最早遅八刻なのである。懷へ瓦色を見鐘聲を聽くの一段において宗旨の玄妙を盡したりと雖も、その偏位に於ては、都府樓の懷ひ、觀音寺を偈ぶの事があつた筈である。菅公の配所にありて衣を拵じたのと、大燈が開堂の須彌壇上に衣を拵じたのと、稍々其狀を異にするも、其眞意に至つては共に 天皇の高恩を憧憬し奉るものがあつたのである。這うした美妙極まる鮮巧の寶珠は同書全部に下語點綴せられて、全く大燈の光輝をして一層赫々たらしむるものがある。(大正十年版妙心寺史三〇九頁)

大燈國師の心懷をよくこれ迄に表顯し得る白隠に於ても、吾人は更にその奥底を覗ひ得て餘りありと考へられるのである。随つて彼の朝夕の垂示は、一として 皇國の昌隆と聖壽の萬歲に資せざるものはなかつたのであつて、このことは於仁安佐美の卷尾に明瞭に識取される。即ち

願くばこの功德力によりて 皇圖鞏固佛日光輝ならんことを、特に祈る 今上皇帝聖躬萬歲なら

んことを……

×

×

白隠禪師は、一方宗旨上に於て一意龍象の打出に精勵され、所謂四天王、二甘諸、三頓、五傑、二崎哲、五哲、六客、六法子、八印と云つた驚くべき多數の大法財を輩出したのであつたが、又これと同時に他方一般民衆に對する教化も積極的であつて、現在残つてゐる數多の假名法語、世俗歌書翰等に於て、充分之を察知することが出来る。主心お婆々粉引歌に

有がたいぞや天地の御恩、あつささむさの程までも、夜と晝とはなうてはならぬ、ひるは働く夜分休む、雨露の御恩で五穀もみのる、すゑの野山の草木まで、君の御恩は山より高い、賤がわらやのはてまでも、繁昌めされよ萬代までも、風に草木のなびく様に

と云つて、四恩を説く内、凡そ人として民として先づ天地の神の御恩と君の御恩を感謝すべきことを、斯くいと平易にすらくと歌つてゐる。

忠と云ふ字を能くくみれば、外へちらさぬ此の心、五尺餘りのからだは持てど、主心なければ小童じや、武藝武術は第二のさたよ、とかく主心がおもじやもの

このあたり「二本棒は野暮らしき」とする武士連への適切な誠告が、恐らく當世風のをんなわらべ式なだれ口調ではあつたらうが、内に痛烈な毒針をこめて口誦まれる。

主の御恩で仕立たからだ、喧嘩などする不覺者、武士は臆病も忠義の一つ、一度主君にあげおくからだ、我身ながらも自由にやならぬ、大事々々と守りましょ、内證つき合ひ傍輩同士にや、狗と云ふとも腹立つな、主の爲なら世間の底も、修羅も紅蓮も辭退せぬ、命限りに切込む所存、是れが勇士の常の住

扱、凡そ禪には思想はない。あるものは、行住坐臥のみ。化導に當つて萬般の施設をみる。施設の一片を採り來つて假に思想とみんか、あらゆる思想が禪の思想となる。あらゆる思想が禪の思想となると云ふのは、夫等のものが、その場合奥底に於て一なるものに結ばれてゐるからである。換言すれば、眼に在つては見と云ひ、耳に在つては聞と云ひ、鼻にあつては香を嗅ぎ、口に在つては談論し、手に在つては執提し、足に在つては運奔するからである。随つて施設の一片を、國土政治風教の視野に在らしめるならば、それは一なるものであり乍ら、同時に國家思想、社會思想、政治思想としてあり得る。茲に、禪家の言説が、他の單なる思想理説とは異り、如實に心源に於て基礎づけられたる表顯の正語である所以が存するのである。

白隱の此の粉引歌に表はれる「忠」の意義も、斯うした哲學的根據をもつものであつて、即ち忠とは、自己の本心を中心とするの謂で、無我を基底とする。無我なればこそ、「主君へあげおくからだ」なのであり、主君への報恩底とあつては「修羅も紅蓮も辭退せぬ」所存があり得るのであり、

又私事の爲にはたとへ「狗と云ふとも」腹が立たぬのである。飽くまで私心を存せず、無我にして滅私奉公をするのが「忠」に外ならない。此の意味は、又次に於て更に鮮明に根據づけられてゐる。凡そ人の臣たるの道は、主君の飯を喫し、主君の衣を纏ひ、主君の帯を結んで、主君の刀を帶ぶ、水も亦他處より擔ひ來るに非ず、耕さずして食ひ、織らずして纏ふ、身體手足髪も爪齒、總に是れ君恩の所成なり。(遠羅天釜)

まことに、明了々の説破である。普天の下 皇土に非ざるはなく率土の濱 皇民に非ざるはなし。この一なるもの、之を白隱は、今呼んで「主心」とする。粉引歌は更に續けて

有難いぞや主心の徳は、太刀や劔の刃もたゝぬ、弓も鐵砲も届かぬからに、敵と云ふ字は更にない。空も月日も海山かけて、土も草木も皆主心、神とまゝ高間が原も、五欲三毒ないところ、民を新にするとは云へど、至善定まるまでのこと、出家も沙門も高位も智者も、主心なければ皆民じや、宮はわらやよわらやは宮よ、主心一つが潮ざかひ、上下萬民主心があらば、治めざれども世は萬歲

此處に至つて、白隱が高天が原を擧するを見る。之は恐らく禪宗思想史上注目すべきことであつて、彼に依れば三教は「主心」に於て一致する。即ち此等は「至善定まり」「三毒五欲ないところ」を以て各道本とするが故である。

昨日三教聖人の贊辭に、三教一致、一致三教、畢竟如何。至善に止るに在りと書送りけるに、至善の兩字得て聞きつべきやとの書面、近頃奇特千萬の好一撻、隨喜の餘り取りあへず、大略書付け進覽致し侍り、大凡三世を貫通し古今を銷融するものは、至善なり、昔黃帝遙に廣成子が巖窟を尋ねて、大道の至要を求め給ふ、廣成子が曰く、陛下若し大道を求め給はゞ、齋戒沐浴七日を歷て來り給ふべしと、帝教へに任せて三七齋戒して行きて道を求め給ふ。廣成子が曰く、至道の極昏々黙々たり、至道の精杳々冥々たりと云ひ畢りて、眼を收めて總にもいはず、大凡十方の聖賢古今の智者、至善に止まることを勤めて、而して後に明德を明らかにし、大道を成就す、禪門には是を無相心地の戒體とし、密乘には是を阿字不生の日輪とし、台教には是を法性寂然圓頓止觀の大事とし、淨家には是を唯心淨土六十恒河俱底那由多旬の如來とし、老莊は是を虛無の大道とし、神家者は高天原と相傳す。三世古今の間に至善を精修せずして法成就に至るものは半箇もまた無し。(三教一致の辨)

斯くて、高天が原とは、至善に止るところ、三毒五欲ないところに外ならず、之を以てみれば、白隠が我が建國の無始無終なる天地の道本に基くものであることを自覺し、之と同時に、所謂高天が原は單なる神話としてのそれに止まらず、即今現成底の高天が原を意味するものであることを知り得るのであつて、此處に白隠の神道への偉大なる積極的、具體的志向を認め得ると思ふ。

定め得て、寤寐合一に至る時は

たかまが原も、餘所ならばこそ

随つて、彼が爐鞴に入り來る者に對しては「國常立尊未だ出現せざる以前、作麼生か是れ汝が面目」「此尊何れの處よりか出現し來る」「天神地祇八百萬神を出現せよ」。(鶴羽集附則)等の公案を以て、高天が原の消息を究明せしめることに萬全の横關を用意したのであつた。思ふに、此頃漸く國學は勃興の機運を示し、賀茂真淵の「國意考」の著述あり、一方伊勢吉田垂加等の諸神道亦各々大いにその論を競ふの時代であつたから、白隱の神道への志向は蓋し當然のことであつたとは考へられるが、而も彼の舉起するところは、從來の垂迹や習合説の域に在らずして、實に端的惺々着、されば身祇官にして參禪する者もあり、従つて一般にも相當の影響を及ぼせるものと察すべく、以て白隱の神道への功績を認めざるを得ないのである。

x

x

扱白隱の時代は、既に知る如く一般の狀勢よりすれば、太平の餘り武士道は次第に衰へ

弓は袋に矢は箱に、鎧兜と云ふ物も、五月人形に見たばかり、屏風襖や繪草紙に、唐や日本の軍事、能や謡や芝居物、みたり聞いたたりなぐさむも、今太平のお蔭ぞや、その辨へも荒磯の、波間に遊ぶ鯛すゞき、雲間の鶴や鴨雉子、煮たり焼いたり飲食に、不足云ふたり好み事、是れなに故

と尋れば、世のうきふしをしらぬ故、ひだるい寒いと云ふことは、乞食非人の身の上の事と計りに心得て、あれば有るほど足ることを、しらぬが上の驕り事、飯がいやなら砂糖餅、あんまとり、くきげんととり、誠の軍の切合を、みたい物ぢやとあだ口も、あゝ勿體無や恐ろしや。(御代の腹鼓)

とあつて、凡そ武士はその木領を失却し、單に口頭武士に終つてゐたことを知ることが出来るのであるが、然らば、白隠は彼等に對して如何なる教化をされてゐたか。これに就ては、前述の紛引歌の場合に於てもその片鱗は示されてゐるが、端的には大死一番の「死」を以てその中心標語とする。明和二年の春、或る家中の若武士に大文字に「死」の一字を書し、その下に「若し人、見徹し得ば、名けて眞の大丈夫となす」と添へて與へてゐる。即ち「死」が至善主心を定め、直ちに武道の奥義となり、高天が原の體證となり、隨つて忠孝文武の基底を爲すと教へるのである。君に對して私心なく仕へる、滅私奉公と云ふことは、無我を以ての故であつて、之は大死一番、死を通過して始めて可能である。凡そ「死」の過程を踏まずして滅私奉公はあり得ない。例へば感性や理性に起因するが如き滅私は、決して眞箇のものではなく、假に一時的には可能とするもその常住永續性はない。近代政治史及現在の「精動」は、之を如實に證明して餘りある。まことに、白隠の此の「死」の一字、得て簡にして撤せりと謂ふべきである。

若い衆や、死ぬがいやなら、今死にやれ、一とたび死ねば、もう死なぬぞや

口はきけど、一と度しなぬ、侍は、まさかのときに、逃げつかくれつ

臍の底で、一たび死んだ男には、眞田が槍も、はも立たぬなり

生きながら、死んで働く、をのこ子は、爲朝が箭も、つがもない事

臍輪の底で果てたる侍は、世界國土に敵あらばこそ

丹田に主心定めて、よくみれば、ちきに至善、生きた極樂

定まるが、直に武道の奥義ぞや、命にかけて、さだむるがよし

死んだとて、我儘するは不覺悟ぞ、君には忠義、父母に孝

次に、藩主に對してはどうであつたか。之は夜船閑話下卷及遠羅天釜に残る書翰文によつて、その全幅を覗ふことが出来る。前者に於ては、「某國某城主」に送つたものとして、就中政治にその筆を及ぼし

願くば、此嘉運に乗じて、君臣ともに志を合せ、計を定めて、臍を嘗め、血を啜りて、誓て節儉を守り、其餘力を分ち、生民を安撫し、仁澤を施し玉ふ事、三四年を歴ば、國夫れ再び蘇活せんか、此において、以て足れりとせず、身を潜め、心を苦しめ、専ら仁政を勤め行ひ玉はど、いつしか、君を堯舜の君にし、民は堯舜の民たらむ、此時に當りて、天神鎮こしなに鎮護し、地祇不祥を

呵禁して、子葉繁茂し、孫枝發越して、國脈必ず泰山の安が如けん……

とあり、凡そ城主としてその藩政を全ふせんには、廣く仁澤を施すことを第一とする、仁政法施以て天神地祇に叶ひ國脈安泰を將來することを述べ、古今東西の實例を擧げてゐるが、此の書翰は、草稿ではあるが仲々の長文であつて、その紙背に秘めたる白隱の底意、恐らくは「某國某城主」とある點よりみても、藩政亂脈を極めたる某藩主への諫告狀であつたに違ひない。遠羅天釜の「答鍋島攝州侯近侍書」に於ては、之を近侍に托しての鍋島侯宛のものとみられるが、これ亦前者に劣らぬ長文で、就中、

法門無量誓願學と申す事の侍れば、菴居の人々の他後法施の一助ともなれかし、且つ千兵は得易く一時は求め難しと申すことも侍れば、書中少しにても取るべき處あつて、幕下の道情をも助け増して禪學成熟し給はゞ、その餘波必ず左右の人々に及ばん、左右若しその恩波に浴せば、其の澤必ず一國の人々に及ばん、何が故ぞ、一人の心は千萬人の心なる故に、つるに天下國家に及ばし、上王化を佐け、下庶民を利せん、然らば則ち宇宙の間、那箇の盛事か是れに如かんや、これ老僧が平生の微志なり、若し然らずんば、何の追從にか終夜孤燈を排げ、老眼を摩挲して、はてしもなき問はず語りを、繰り返し／＼書き送り侍るべきにや

と言つて、それに續いて侯が内觀發生の祕術に契ひ、心身共に壯健にして速に參禪得力、**因地一下**

の歡喜を得られ、并せてこの内觀の加被力によりて、よく長壽を保ち、上天下の政事をも輔けて萬民を憐撫し、内法寶を衛護して飽くまで法喜禪悅の樂を究めて、以て大法成就に至られんことを縷々として述べてあるが、白隱の興禪護國底の心願は茲によく充分批撫され盡してゐると思ふ。然もその熱意に於ては、「これ老僧が平生の微志なり……」と云つて、彼が雲衲の夜參の果てを待つて漸く筆硯をとり、徐ろに行燈を引寄せ、燈蕊をかきたて、幾夜か老眼を摩挲しつゝ反々覆々、述べ來り述べ去るの狀を擧然せしめられるのであつて、恐らく鬼神も感激措かざるところであらう。

白隱は尙、庄屋名主等に對しても、その南針を指示することを怠つてはゐない。「村民の長殿千秋萬歳子孫繁昌御祈禱の謎々」に

桶屋の正直十二、村民の長殿とはどうぢや

ハテ村を削り取るはさて

深山の熟柿十二、長殿の御家とはどうぢや

ハテ皆人知らず残らずつぶれて仕舞うての、井戸ばか残る程によ、近頃申にくけれど、長殿ばかでもありやらぬよ

若し村民の長たらんず人々は、毎日此謎を三復せば子孫萬歳目出度かるべし、來世につけてもサ

とあつて、封を削り取り、果ては自業自得で壊滅し去る當時の長殿へ、まことに謎々にかかる大塗毒鼓を打たれてゐる。

思ふに、遠く參觀交代の制度に因を發し、太平の浮華榮耀なる遊行生活を柏車とせる經濟組織の藩主―地主―より町人―商人―への移行による變動は、自然に諸侯武士階級の貧困を來し、爲に藩主を始め各支配階級は、その各々の勢力を保持し機關を維持する爲には、或ひは新興町人より借財し或ひは庶民よりの増税によるの外はなかつた。然も一旦末世的風潮に墮した人心は、容易に事の正鵠を得ること難く、されば村の長殿に於てさへも「村を削り取る」とあり、更に「長殿ばかりでもありやらぬ」とあつて、凡そ藩主より奉行代官等に至るまで、苛斂誅求を事としたこと、概して察し得られる。斯かる時、白隱がよく隨處に圓融剷切なる言詮を致し、以て一意興禪護國の誠を示されたことは、鶴林の光輝更に一燈火を添へるものと信ずる。由來白隱禪師は、餘りにも大宗師であつたが爲に、斯うした「時代への貢賚」は暇なく取上げられない。末世の後昆は唯箇事の一事を舉ぐるを以て先師に叶へりと爲し、就中故意に世を通れ國勢の東西何れに向ひつゝあるやも念ぜず、松深きところ雲の行くをみるを以つて宗風を作り來つたかの觀があるが、禪師の此の事蹟は、實に一事を擧ぐるは萬事を擧ぐるなりで、興禪と護國との無礙相即なる軌範を示されたものとして、吾人の深く留意すべきところであらう。

白隱四天王の隨一、綿密を以て聞えた東嶺は、その宗通説通共に或ひは師をしのぐものがあつたが、其神道に於けるものに於ては、まさに燦爛たるものがある。明和五年白隱遷化の年「神儒佛三法孝經口解一卷」を著し、白隱に於ける神道的なるものを一層鮮明となした。之は祇官であり又東嶺の居士であつた小谷青齋の依囑によるものであつて、青齋は純神乗の王道が兩部神道や本地垂迹説に大ひに發揚されてゐるにも拘らず、當時幕政によつて之が衰退の道を辿るに在るを慷慨し、その復興を彼に依頼した爲であるが、東嶺は茲に於て、實に無相禪を本位とする宗源神道再興を企て、青齋より神道を、東叡山光潤律師より宗源神道を夫々つぶさに講究、その蘊奥を極め、遂に此の書の發刊を見たのであつた。まことにその意圖するところ、完全なる日本禪の創建にありとみるべく事は以後百七十年を経過する今日、再び拈じ來るべき問題ではないかと思ふ。

扱これより先、白隱の頃より度會賞彰、谷川士清、吉見幸和等が相繼いで神道明辨、日本書紀通證、國學辨疑等を著し、所謂神乗の道を開陳するのであるが、東嶺は

當に知るべし神乘佛法は同一理體なり。但是れ見性の一法を出でず。若し能く自性を明むる時は、則ち先づ混沌の理に契ふ。重ねて性中に於て深旨を研究すれば、漸くその堺を出で、混沌の始めに歸す。嗟呼一箇の始の字、辛辣にして近傍し難し。神乗の學者等閑の看を作すこと莫れ。(無

盡燈論下(三十丁)

と謂つて、單なる口説の境を出でざる神乗者に、見性によつてその道本を極むべきことを示し、又大凡そ神とは心なり。心垢滅盡して鏡の明了なるが如き、是を神と謂ふ。是故に神乗は鏡を以て表體と爲す。心鏡は本來清淨にして常住寂然たり、是を國常立尊と謂ふ。心鏡は本來圓明にして物として現ぜざることなし。是を天照大神と謂ふ。(同前)

と明白に、茲に神道の哲學的宗教的法理を演説する。之は「神人説いて此法を守ると云ふ者は、只名目のみ」^{註④}であつた神乗家に、實に活きたる神道、神隨の道そのものとしての活を注入したものとして注目すべきである。尙吾人は、彼の「三法孝經口解」に就き、その所述を考究することに依つて、東嶺和尚の禪本神道の全貌を、此處に擧げるべきであるが、殘念乍ら筆者の手許になく、隨つては各自有志の方にお任せすることにして、御免を蒙りたいと思ふ。

註① 忘名

註② 荆叢毒藥卷一

註③ 大正十年版妙心寺史參照

註④ 無盡燈論に出づ